「社会福祉」第五集の発刊に際して

菅　支　那

日本女子大学という、大きな複合体とも云うべき学園社会の一角にあつて、当然、皆が負うべきいろいろな学園の任務を果すかたわら、ささやかな研究生活の一端を披露し続けてここに丸四年、桜楓会員と学生諸子一致の支援によりまして、兎に角、私共の「社会福祉」も第五集を発刊する運びとなりました。殊に今回は本学科出身者の特集号として、特別な協力が得られましたことは、感謝の至りです。

大正十四年、本学科第一回の卒業生を世に送り出して以来卅有余年、社会事業学部、家政学部第三類、家政科管理科、家政科社会福祉科、家政学部社会福祉学科と、専門学校から新制大学への経路をたどつて来ました。又その名称と共に学科内容も幾度変遷、所謂、浮沈と変化の生活を体験して、今日に至りました。そして今や、永年の懸案であつた家政学部から文学部への移行が、これ又幾多の関門をくぐり、レッド・テープを打ち破つて、実現することになりました。時勢の然らしめるところとは申せ、学内、学外からの多大の奨励と暖い批判、又卒業生の皆々様の祈りと支えがなかつたならば、社会福祉学科もこの日を見ることが出来なかつたろうことを思い、心から感謝すると共に、御同慶に堪えない次第です。

いよいよこの四月から、新入生はもとより、この科に在学する上級生も揃つて文学部に移行することになり、その課程を満足におさめた暁には、従来の家政学士の代りに、社会学士が与えられることになりました。

一見しただけでは解りにくいでしようが、しつかりした社会科学の基礎の上にたつて、専門的社会福祉事業家

となれるよう、又急激に婦人の眼前に開かれた様々な責任の分野に、自信を以て進み得るよう、学科目の編成にも相当の苦心と研究が重ねられて、現行のものになりました。本学教育方針のいろいろな枠内で、国内的国際的なこの方面の諸大学が堅持する理想をこれらの学科目にもり、本学科の特長も同時に発揮するよう努力しました。又本学の経済力が許す限り、教授陣が一層、強化して行くのは当然で、既にその方向に進んでいます。

勿論、文学部に移行するだけが私共の最後の念願ではなく、設立当初のように、独立した学部になることでしよう。しかし未だ本学の事情が許さぬことは、皆様御案内の通りです。

ここにあわせ考えて、お互いの心に銘して置きたいのは、生江先生のこの学科に対する、量り知れぬ大きな期待です。昨年六月の五日、先生の御宅から「病い篤し」との電話です。先生が社会福祉学科の者に会いたがつていられると、二、三の方から聞かされている折柄でした。その日、学内での用をすませて、科の先生方二人を同道してお宅にかけつけたのが四時すぎ、病室の前に立つて生江先生と呼ぶと、「上れ」という御返事です。意外にしつかりしたお声に幾分、安堵しつつ、先生のベッドの囲りに坐りました。見ると初夏というのに電燈を赤々と顔の真上にたれさげ、上臥していられても一向に平気の御様子、道理で眼は閉じられたまま、眼の囲りがとてもむくんで拝されました。そして諄々と一時間余に亘り、大正七年に始つた成瀬、麻生両先生との間柄、先生と本学科との関係、家政学部第三類に転じた時の事情、今後の本学科の進路について、続け様に語られました。自分は眼は見えず、新聞も読まぬから、ラヂオを聞き、心で社会を見ているが、日本女子大学の一大変革の一つは矢張り、社会福祉科を拡大して、学部として残して置くことだ。女子大学の歴史を見ると、創立者は婦人を社会的の人物——社会的人格——にするのが二回目の外遊の目的であつた……あの時、家政学部に入つた責任は私であつた。これをあなた方に知らせたかつた。……元に帰る迄は家政学部の一部として同居させてもらい、後では必ず元に帰るというのが綿貫、高橋の両君と私、その時の校長、麻生先生の強固な意見であつた……と、先生

の御話はどこ迄続くとも予想がつきません。初夏の夕刻、しかも緊張裡に一時間を過し、寧ろ私達が疲れ気味なので、お休みになるよう促すと、「疲れてもかまわぬ、私の生命の事だから」……と尚も続けてこの科の創設当時の事情を細々と話されました。あの時、麻生君がいなかつたら、あれだけの決断をする人はなかつた。そして今の状態に変化した。現状のままで、創立者の生誕百年記念をするのに自分は忍びない。……「最初に教えられたことが最上であるように思うのが人間の弊である、それが婦人の弊である。」生誕百年記念事業として、是非、実現して欲しい。しかしそれを如何に実現するかが問題である。……あの当時には、社会事業を講ずる人がなかつた。日本女子大、明治学院に社会事業を講ずると云うても、生江をおいて人がいなかつた。その当時、社会学は教えられたが、応用社会学は誰も教え得られなかつた。その頃スラムの事を教えたので非常に人々の興味を引いた……。「学部にするのが最大の祈りである」……と。又御自分についても細しく触れられました。又の日を約して辞そうとすると、「今日は実に好い日であつた——日日是好日——。これで私は何日死んでもよい」と。遅しい社会的理想に九十余年の生涯を生きぬいた人のこの言葉を耳底に残して、結局、此の世では最後の別れを告げたわけでした。永遠の命を体感しつつ、光明に輝く平安な世界をのぞき得たこの人の高い境涯、社会事業一すじの道を突き進まれたこの先生が、斯く我が社会福祉学科の大切な生みの親、育ての親であつたことを、後に続く若い方々も是非、心に銘して置かれるよう、念じてやみません。

この科の文学部移行に際して、殊に思い起してその実現に努めたいのは、成瀬先生の女子綜合大学に対する構想です。先生は社会科を文学部の側に入れ、文学部を又宗教科とも呼ばれました。今回、漸くその列に加わることになつた本学科として、その根柢に宗教的生命が流れておらねばならぬことを、新に覚悟したいと思います。単なる知識と技術を如何に積み上げても、それだけでは先生の高い期待に答えるものでないことも忘れますまい。そこにこそ本学科の独自性が存することを、いつまでも覚えて置きましょう。（——内の言葉は筆者の註）